

巻頭言

たゆたえども沈まず——

「月刊東海財界」創刊5周年を迎えて

中部財界フォーラム社 代表取締役 塚本 隆

月刊東海財界が名古屋に産声を上げて、二月、五周年を迎えました。発行元の社長として、創刊号を手にしてから「五歳の誕生日」までは、あつという間の出来事だったような気がします。しかし、曲がりなりにここまで続けられたのは、何よりも読み続けていただいた読者諸氏と温かい支援の目で見守っていただいた広告主の皆様のおかげであった、と改めて感じ入り、この場を借りて心より感謝を申し上げます。

あつという間とはいえ、この間、大海原で嵐に遭った小舟のように揺すぶられ、あるいは漂うように、羅針盤を失いかけて、ただ耐えた時があったのも事実です。創刊からこれまでを振り返っても冷や汗が止まらない時もありました。

創刊前に私が勤務していた中部財界は、徐々に低迷していた広告売上も平成二十三年の東日本大震災が引き金となり、一時期の五〇%になり、定期購読に至っては、全盛期の四〇%にまで落ち込

みました。経費面を考え、長年本社があった中日ビルから移転するなど事務所を変え、出来る事はしましたが、ついに同年九月号で休刊となったのです。

私自身が、某広告代理店から中部財界に入社したのは、創業者川村洋輝氏の人柄、カリスマ性に魅かれたこと、中部財界の経済誌としての影響力、地域経済における必要性を感じたからでした。ただ、経営悪化の中、これからは一人のんびりとやりたい事をやっていこうと、諦めの

気持ちも頭ももたげていました。私を慕ってくれた社員もいたので、そんな社員の就職相談や出来そうな職種の会社の社長に話をし、面接をしてもらおうなどして、それで私の任務は終わりにしようと考えていました。しかし、社員はそうではなかったのでしょう。中部財界の末期、何とか再建しようと動き回っていた私を見て、引き継いで中部財界が継続して行くと思っていたのかもしれない。

五〇数年続いてきた経済雑誌を営業上がりの私が引き継ぐことはあまりにも無礼かつ、無謀な話と私自身は考えていましたし、今でも思っています。ただ、当時営業・編集統括部長としての責任などを考えて、社員との話し合いを始め、新たな月刊誌の創刊を決断した時は、まったくのゼロからのスタートでした。あつたのは私と社員の「東海地区に経済雑誌は必要だ」「ネット全盛のこの時代に手作り感のある地産地消の経済誌は受け入れられるはずだ」という志と、中部財界の知識、経験、そして親しいクライアント

トの皆様方からの「復活させてよ」との励ましの言葉だけでした。先行不透明の中、改めて社員の覚悟を聞くと、予想に反してそれでもやるとの返事でした。

そして、やる以上は、中部財界が築き上げてきた歴史、伝統、品格を守りつつ、新しい雑誌、東海財界をいかにして作るかを考えました。私なりに中部財界のやり方を変え、まったく別のやり方でスタートすることを考えました。たとえば、外注のライターさんの数を倍以上に増やし、取捨選択することなどです。新たな船出には危機が付きまとうものですが、それまでとは異なる、仕事にシビアになる厳しい意識を社員にも求めました。おそらく、社員は戸惑ったでしょうが、丸四年の間、めげずによくやってくれました。

読者と広告主の皆様のおかげで、ここまでたどり着いたとはいえ、まだまだ地元に着した、地元と共に歩む経済誌としての編集面での課題は山ほど残ってい

ると思います。また、時代も混んとしっていて、経営面での難局は、まだ続くことが予想されます。しかし、支援していただいていた皆様への期待に応えて、いかにして波を乗り切っていくのか、沈む前に何をすべきか、再び難破するわけにはいかない、と考えています。

「たゆたえども 沈まず」は『Fluctuat nec mergitur』。ラテン語で「フルクトゥアト・ネク・メルギトゥル」と読み、テロに見舞われ続けているフランス・パリ市の紋章に記されている言葉でもあります。「荒天に見舞われて帆布が裂け、舵も失い、波風に翻弄されても、決して船は沈まない、沈ませないぞ」というメッセージが込められているようです。信頼できる仲間たちの存在と感謝を忘れなければ船は、また前に進むことができます、と信じたいと、私は思っています。

あきらめずに頑張ることを五年目の誓いにします。今後とも、よろしくお願いたします。